

## 「家で親を看取る～その時あなたは～」を視聴して

老年医学上 65～75歳は「前期高齢者」、75歳～84歳は「後期高齢者」、85歳以上は「超高齢者」と呼称され、当 HP に『平穩死のすすめ』を読んで（HP「雑学 BN」の書籍等読後感関係（VI）、2013.04.06.：参照）を掲載したが、即応するかのように先日、超高齢者に寄り添う家族のルポ番組「家で親を看取（みと）る～その時あなたは～」を視聴した。

現在、日本人の在宅死はわずか2割程で、国は超高齢者の医療費削減の対策として看取りの場所を在宅への政策を打ち出し、在宅医療や看護、介護サービスの整備を進めている。

入院が長引けば長引く程診療報酬が少なくなり病院経営が圧迫されるので、治療が終わり容態が安定すると退院を勧めるが、在宅医療や看護、介護サービスの整備はまだまだ十分でなく、在宅で過ごす本人、介護する家族共々その苦痛・苦悩は計りしれなく、在宅の現場からそうした問題点をルポした番組であった。

・退院後家で過ごす老衰で嚥下障害の男性の超高齢者は、「生きるためには一生懸命食ったり飲んだりね。大変よ本当に…」と、涙を浮かべながら話す。

・父親の在宅看護の家族が主治医に急変の時の対処について聞くと、在宅医は「延命措置を望まないなら救急車を呼ばないように。呼んだら彼らは仕事なので（蘇生を）始めますので。」と応える。

・胃漏をつけて退院し老衰で意志の疎通もない母親の終わらない苦しみをどうにかして上げたいと胃漏中止を娘さんから相談された在宅医は、昨年6月に日本老年医学会から胃漏中止については患者の意思が確認できなくても、主治医などが本人のためにならないと判断すれば中止してもいいという見解のガイドラインが出たがそれとて法的に定められていないことから苦悩し他の医師等と相談していたが、母親は胃漏中止前に亡くなったが、娘さんは胃漏中止を決めた自分の判断が正しかったのかどうかを今も問い続けている。

家で看取る家族や訪問医等の様々な葛藤のルポ番組でもあった。

年老いても住み慣れた家や地域で暮らしつつ最期を穏やかに迎えられる社会のインフラ整備・充実には、まだまだ道遠いようだが、まずは「看取る」ことを委ねられる家族が戸惑わないように、我々自身が自らの“老い”や“死”をどう受け入れるかを、日頃から周り（家族等）に語り続けることも肝要なことのように思えた。